帰りたくない？ 帰れない？？

米定住の邦人駐在員 増加

ゆとりの生活 離れがたく

不況で国内受け皿縮小

米国へ派遣されたまま、日本に戻らずに定住してしまう邦人駐在員が増えている。帰国する時の日本側の職場の受け皿が、不況によって小さくなったことが一つの要因のようで、身分を現地採用社員に切り替えたり、現地の企業にくら替えしたりという例が多い。ただ、それだけではなく価値観の異なる米国で暮らしたことで自分の生き方や会社中心の日本社会のあり方に疑問を抱き、あるいはビジネスの新しい可能性に目覚めるなど、積極的な理由で定住を決断する人も少なくない。果たしてバブル景気の後遺症なのか、新しい潮流なのか、まだ判断はつけられないようだ。（ニューヨーク＝平沢雅子）

佐々木さん㊨はバブル崩壊で業務が縮小した日本へ帰らず、米国定住の道を選んだ

ニューヨークの一等地、五十二丁目の東側に事務所を構えるオフィス家具販売会社キー・インターナショナルの社長、佐々木晴さん（48）は八五年に駐在員として米国に来た。バブル崩の勢いに乗って国際化を進めていた日本の大手家具会社の現地法人をニューヨークで立ち上げるのが目的だった。

滑り出しは順調だったが、「そのうち品質や価格の面で優れている米国製と競うことに無理が出てきた」（佐々木社長）。苦境を乗り切るため、現地に根差した営業や販売へ方向転換したが結果は裏目に出た。「日本の本社ではわれわれが何をしているか分からなくなってしまったようだし、米国側でもなぜ日本で理解してくれないのか疑問が膨らんだ」と振り返る。

九〇年に帰国命令が出た。しかし、バブルがはじけて日本では業務縮小が進み、最盛期に十人いた国際部が四人になっていた。といって、全く異なる部署で一から出直すのでは「米国で五年間培ったものがもったいない」と考えた。決断の時だった。家族が米国定住に賛成したことも後押しになり辞表を提出、九一年十一月に駐在時代の同僚二人とキー・インターナショナルを設立した。

人材紹介・派遣、コンサルティング会社のマックスコンサルティング・グループ社長の名倉学さん（32）も駐在員から定住組に転向した一人だ。日系大手人材派遣会社の駐在員として八八年から事務所の新設などにかかわった。ところが、ある日、駐在員から現地採用社員への身分の変更を言い渡された。米国人と結婚していたため米国定住に抵抗はなかったが、駐在手当は打ち切られ給与も減るという経済的な打撃は受けた。

こうした仕事上の理由でなく、「子供の問題や米国の生活の良さが大きな理由になっているケースもある」（移民法専門のロナルド・フリーマン弁護士）。確かに、子供たちは大抵の場合、親より早く米国の生活に慣れる。帰国して日本の受験戦争で苦しませるよりは「米国で伸び伸び学ばせたい」との親心ごころが働く。親自身にとっても、時間や空間にゆとりのある米国生活は、一度経験すると、離れがたいものとなるようだ。

また見逃せないのは、日本人が米国で生活しやすい環境が整いつつあること。現在、米国には六万人の駐在員がいて、留学生なども含めた日本人総数は二十五万人。統計に表れない実数はその二倍とも言われている。ほぼ、どこに住んでも日本食の食材が手に入り、地域によっては日本語のテレビ放送、新聞さえある。

定住に必要な永住ビザを持つ日本人は過去四年間で急増した。米移民局は四年前から毎年永住権の抽選を行っており、これまで約一万人の日本人が永住権を手に入れた。

しかし、定住は良いことずくめではない。親の老後の世話や子供も米国に永住させるのかという問題、自分自身の老後の年金や医療問題など、「元駐在員」たちが乗り越えなければならない不安は多いようだ。

マックスコンサルティングの名倉さん㊨も駐在員から定住組に転向した一人だ

世界の街角